



乾燥地・半乾燥地での「水」

——中央アジアを知るための五冊

地田徹朗

日本の中央アジア研究は、考古学・東洋史学に長い伝統があり、研究蓄積も圧倒的に豊かである。他方で、ソ連時代から独立後にかけての政治・経済・社会について書かれた著作は多くない。しかし、それは日本

の中央アジア地域研究の研究者層や蓄積が薄いということを意味するわけではない。少数精鋭で数は決して多くないが、豊かな研究成果を国内だけでなく世界に発信している。もちろん、外国人による英語やロシア語の著作を含めればその数は膨大なわけだが、本稿でそれらを紹介することに意味があるとは思えない。かといって、初学者のために概説書・教科書を五冊あげるといっても面白みに欠ける。そこで、乾燥地・半乾燥地に位置する中央アジア地域にとって極めてセンシティブな「水」をめぐる問題というテーマを設定し、この問題について触れている五冊をここでは紹介することにした。

なお、本稿では、旧ソ連の一部であった五ヶ国（ウズベキスタン、カザフスタン、クルグズスタン^①、タジキスタン、トルクメニスタン）の領域を「中央アジア」と定義しておく。それは有意な地域概念だと評者は考えているが、地域概念は様々なコンテキストの中で社会的に構築されるものであり、必ずしも普遍的に通用するものではないということをおろかじめ断っておく。

① 『プラトーフ短編集』（原卓也訳）岩波書店（岩波文庫）、一九九二年。

「中央アジアを知る五冊」と銘打っておきながら、いきなり文学作品、それもソ連時代のロシア人作家による作品集かと思われる方もいるだろう。しかし、中央アジアの水について考える上で、あるいは、中央アジアの乾燥地や沙漠をイメージする上で、本書はまず読んでおきたい一冊なのである。

アンドレイ・プラトーフは、一八九九年にロシア南西部のヴォロネジ州の村で生まれ、十月革命後の内戦時に赤軍に加わり、技師として働くかたわら小説や詩を書き続け、一九二〇年代末にソ連の文壇で注目されるようになった人物である。本書に収められた「粘土沙漠」と「ジャン」は、一九三四年にプラトーフがソ連作家同盟の代表団の一員としてトルクメニスタンを訪れた後に書かれたものであり、沙漠に生きる民にとって革命とは何か、社会主義とは何かということを考えさせられる作品だ。

「粘土沙漠」の舞台は「外ウングス・カラ・クム沙漠」とされている。これは、トルクメニスタン東北部の沙漠地帯のことである。「ジャン」の



図 今日の中央アジアと旧ヒヴァ・ハン国の版図
出典：筆者とささやめぐみ作成

舞台は、「粘土砂漠」より緯度的には北で、アムダリヤ川河口付近の湿地帯と沙漠との境目である。ジャンの人々はそのからトルクメニスタン中部にある「サルカムシユ陥没地」を指してさまよい歩くことになる。当時、サルカムシユには水はなかったが、今では農業排水の行きつく先となっていて水を煌々と湛えている。「粘土砂漠」に登場するアタフ・バは十月革命後の中央アジアでの反ボリシェヴィキ武装闘争であるバス

マチの一派を率いており、沙漠を攻撃の拠点にしている。ジャンの人々は、様々な桎梏から逃れて流れ着いた先のこの世の果てのような沙漠で身を寄せ合っている。沙漠というものは、歴史的人々が逃れて身を隠す場所でもあったのだ。

沙漠というと一般的に黄色い砂丘と吹きすさぶ砂嵐とを想像しがちであるが、実際には礫沙漠、粘土砂漠など多様性に満ちている。これら二作品では、その移り変わる沙漠の風景が鮮やかに描かれている。そして、沙漠に住む、沙漠を移動する上で最も重要なのは水の在り処である。沙漠に住む人々は、風景や地形、植生の微妙な変化を読み取り、水がどこに潜んでいるのかを探り当てる。「ジャン」では、わずかな水がどこにあるのか探し求めながら人々はサルカムシユを目指す。弱り果てた人々が地表面からわずかに染み出した水を砂と共に口に含む様子は痛々しくもあるが、これは沙漠に生きる人々が緊急時に生き残る術なのだろう。そして、淡水がわき出る井戸は沙漠を移動する上で重要な中継地となる。「粘土砂漠」では、井戸が隊商の宿营地だとされている。

「一滴の水は一粒の金」というトルクメンの箴言があるが、これは沙漠に住む人々の水に対する姿勢をよく表している。本書のプラトノフの二作品を読むと、中央アジアの沙漠と水、そこでの人々の生活が鮮やかに浮かんでくる。

② 塩谷哲史『中央アジア灌漑史序説：ラウザン運河とヒヴァ・ハン国の興亡』風響社、二〇一四年。

東洋史学の学術書のうち、水と密接にかかわる一冊をここでは取り上げたい。①のプラトノフの二作品の舞台であるアムダリヤ川下流域（ホラズム地方）とその西南方の外ウングズ・カラ・クム沙漠（の北部）を版図としていたヒヴァ・ハン国の歴史が本書の対象である。「灌漑史」を銘打っているが、このことが想起させる環境史的内容は限定的であり、実際には灌漑水路及び灌漑地の開発をめぐる政治経済史というのがより

正しいだろうか。むしろ、ホラズム地方の西方で移動牧畜に従事していたトルクメンとの関係や、一九世紀に南下し、一八七〇年にヒヴァ・ハン国を保護国としたロシア帝国による灌漑計画、そこへのロシア皇帝の

親族も含むロシア貴族や企業家の関与などが本書の中心的内容になっている。そして、何よりも、ヒヴァ・ハン国史についての学術書は管見の限り本邦初であり、それ自体が大きな本書の学術的貢献である。

本書の内容で最も印象的だったのは、ヒヴァ・ハン国とトルクメンとの関係についてである。筆者は、一八世紀末から一九世紀前半にかけてのヒヴァ・ハン国のトルクメン地域との関係について、「軍事遠征と灌漑事業の結合」が「ハン国西部の新灌漑地におけるトルクメン諸部族の定住化を促進させる主要因となった」（八一頁）と指摘している。当時、そもそも国境概念は希薄で、国際情勢やハン国内部の政治状況によって、トルクメンとの関係もダイナミックに変化していた。ヒヴァ・ハン国政府は、軍事遠征の結果臣従したトルクメンをヒヴァ・ハン国西部の沙漠との境界地域に入植させ、灌漑農業に従事させた。ただし、ハン国が重視していたのは騎馬を操るトルクメンの軍事力だった。そこで、ウズベクやサルトなどハン国内部で灌漑に元から従事していた農耕民とは別の、軍役を主とする土地・税制度が適用された。ただし、移動牧畜に従事する民は、定住農耕民およびその国家にとってそもそも不確実な存在である。トルクメンの中には元の遊牧生活に戻ってしまう集団がいたり、ハン国に対して略奪を仕掛け、反抗したりという集団もいた。それへの対抗策として、反抗的なトルクメンが居住する地域に流れ込む運河に堰を築くことで水を止めるなどということもあった。乾燥地で水を止めるということは生きるか死ぬかという問題に直結する。

もちろん、本書で興味深い点はこれだけではない。帝国論やユーラシア経済史の視座から本書を読むこともできるし、ロシア帝国の南下がもたらした「近代化」に対するヒヴァ・ハン国やトルクメンの側からの対抗策・戦略やその受容の様相を描いたものとしても興味深く読める。もちろん、今日のアラル海問題の前史を知っておく上でも重要な一冊だ。

③ 窪田順平監修、渡邊三津子編『中央ユーラシア環境史 3 激動の近現代』臨川書店、二〇二二年。

本書は総合地球環境学研究所の研究プロジェクト「民族／国家の交錯と生業変化を軸とした環境史の解明…中央ユーラシア半乾燥域の変遷」（二〇〇七～二二年度）の最終成果である四巻本シリーズの第三巻として刊行された共著書である。本書の論考すべてが二十世紀から今日に至る中央アジアでの水にまつわる諸問題と関連している。しかも、社会人類学、歴史学、自然地理学、農学、土壌学、水文学の専門家が本書の執筆陣に連ねており、その学際性が本書の大きな特徴である。環境史研究は、文理の壁を超えて異なるディシプリンの研究者と互いに協働し、その内容をいかに咀嚼して組み込んでいくのが勝負となる。それは、いわゆる「リベラル・アーツ」の一つのあるべき姿なのかもしれない。

②で（必ずしも明示的ではないが）描かれているように、中央アジアの農耕民・牧畜民のいわば「近代化」はロシア帝国の南下と共に始まっていた。本書の拙稿（『社会主義体制下での開発政策とその理念…『近代化』の視角から』）は、その後の時代、社会主義国家ソ連の土地制度や農業の変革をつうじて、国家が自然環境と人間社会双方の把握・統制を目標む上での理念と実態についてまとめたものである。ただし、このような「高度近代化主義（high modernism）」（ジュームズ・スコット^②）的な政策・事業は決してソ連だけのものではなく、ナチス・ドイツや毛沢東の中国はもちろんのこと、アメリカや日本を含む世界各地で見られたものであった。ソ連の「社会主義的近代化」は、「合理性を一貫して追及する」という『近代化』のあり方は共通していたが、『近代化』の手段とその現れ方に大きな違いがあった（六八頁）と筆者（であり評者）はまとめた。「行政的」指令的システム、計画経済という「手段」の違いと、それにより国民の経済的な平準化はある程度達成されたが、それが逆説的にソ連経済を蝕んでいったという「現れ方」の違いである。

本書は、社会主義的近代化と気候との関連性と気候要因の牧畜への影

響についてまとめた小長谷有紀による第一章と拙稿(第二章)が総論的な役割を果たしており、第三章(渡邊三津子、清水克之、阿部健一、中村知子による各論考)と第四章(舟川晋也による第一節、水文学者の大西健夫と評者による第二節)が各論となっている。第三章の各論考は、イリ川流域の環境・社会・生業の変遷と現状について現地でのフィールド調査を踏まえて描き出したものであり、現場での生の声に依拠した議論には迫力がある。第四章第一節を著した舟川晋也は紛うことなき自然科学者(土壌学者)であるが、彼による土壌と生業に関する論考は文系の読み手を意識して分かりやすく書かれている。第四章第二節は、中央アジアの環境変化と灌漑農業の問題点について指摘した文字どおり文理融合の共著論文となっている。

本書は、カザフ人やクルグズ人の伝統的な生業である牧畜に対する目配せという点では弱い。あくまで灌漑や土壌など定住農耕に関する内容が中心である。ただし、そのこと自体が、もともと遊牧民だったカザフやオイラトといった民族がソ連や中国の「社会主義的近代化」による熾烈な生活の変容に晒されたということを物語っているとも言える。純粹な遊牧民という存在は「社会主義的近代化」により中央アジアから消えてなくなったのである。

④ 宇山智彦、樋渡雅人編著『現代中央アジア…政治・経済・社会』日本評論社、二〇一八年。

ソ連解体後の中央アジアの政治・経済についての半教科書・半学術書的な共著書は中央アジア五ヶ国のソ連からの独立後、コンスタントに出版されてきた。本書は、そのうち最新のものであり、現代中央アジアの政治・経済・社会を知る上での基本文献だと言える。とはいえ、教科書的な概説に留まらない、学術的な新たな貢献を各論考が目指していることも本書の特色である。本書は政治編、経済編、社会編の三部構成となっている。特に、親族・家族、宗教実践、教育、労働移民の問題を扱った

社会編が入ったのが新しい。

さて、本書では拙稿(第四章「環境問題と環境政策…ソ連時代の負の遺産と新たな課題」)がソ連解体後、つまり、中央アジア五ヶ国の独立後のアラル海問題への対策や地域協力の変遷について概括している。樋渡雅人によるマクロ経済についての論考(第五章)で指摘されているように、中央アジア諸国は食料安全保障の観点から、ソ連時代の綿花モノカルチャーから独立後は小麦など穀物栽培へと徐々に移行してきた。穀物でも米は綿花以上の灌漑水量を必要とするが、小麦は綿花よりも少ない水で栽培できる。また、灌漑での水利用効率の改善も進められ、化学肥料や農薬の投入量もソ連時代より大幅に減少したと考えられる。よって、アラル海に対する環境負荷はかなり減っているはずである。にもかかわらず、アラル海は縮小を続けたわけである。そのような状況下で、今や越境湖沼となったアラル海について北側のカザフスタンと南側のウズベキスタンはどのように捉え、どのような対策を取っているのか、また、アラル海流域(それは、中央アジア五ヶ国とアフガニスタンがさらに加わる)という単位での地域協力はどのような状況にあるのか、ということも概括したのが拙稿の内容である。中央アジア各国の気候変動問題やグリーン経済の導入に関する独立各国の取り組みについても取り上げた。「アラル海の将来についてゴールはすでに定まっている」(八六頁)というのが筆者(であり評者)の見解である。アラル海地域協力の現状は、アラル海そのものをどうするのかということよりも、流域全体でどのように有限の水資源を統合的かつ合理的に管理していくのかということに焦点が移っている。次の⑤でも言及されている上流域での水力発電をどのように扱うのか、それを気候変動問題とどのように結びつけてゆくのかなど、様々な問題について流域全体でコンセンサスが取れておらず、課題は山積している。

あくまで本稿のテーマを「水」と設定したため、拙稿の内容の紹介が中心となったが、刊行されたばかりの書籍ということもあり、本書が中央アジアの「今」を知る上でもっとも好適な一冊であることは間違いない

い。中央アジアについて学びたい人だけでなく、中央アジアに旅行する上で政治や社会の基礎知識を知りたい人にもいい本で、(手前味噌ではあるが) お勧めする。

⑤ ティムール・ダダバエフ『中央アジアの国際関係』東京大学出版会、二〇一四年。

最後に、水をめぐる国家間関係についての論考を含む、中央アジアの国際関係について論じた一冊を挙げておこう。筆者のティムール・ダダバエフはウズベキスタンのタシケント出身で、ウズベキスタンの大学を卒業後、日本の立命館大学で修士号・博士号を取得した人物である。現在も日本の筑波大学で教鞭をとっている。本書は、中央アジア出身の研究者が書いた日本語の著作だという点が重要である。もちろん、本書は客観的な事実と理論に立脚した本格的な学術書なわけだが、随所に、中央アジア、現地出身の研究者だからこその見解が垣間見えて興味深い。日本と中央アジアとの関係について一章を割いており、中央アジア地域研究者だけでなく、国際関係や日本外交に興味がある人にとっても読んでおくべき一冊だ。

本書全体を通して筆者の主張の基調となっているのは、中央アジア五ヶ国の協力と地域統合は、地域の安定的な発展や国際的な地位向上に資するということである。しかし、ソ連からの独立後、各国は、このような地域協力・統合の重要性を理解しているものの、外交の現場ではリアリズム的な考え方に固執するようになった。国際関係のアクターを国家のみに限定して、地域全体の懸案事項に対しても主権と国益を第一に追求する立場を取る。その結果として、地域協力や対話のフォーラムは存在するものの、域内国家どうしが対立する場になってしまっている。このような地域対話の不成立が顕著に現れてしまったのが水を巡る問題だというわけである。

中央アジア五ヶ国は、アラル海に注ぐ二大河川であるアムダリヤ川と

シルダリヤ川の流域に位置している。ソ連が存在していたうちは、流域水資源の管理をソ連中央が責任をもって執り行っていたが、ソ連の解体と共に水管理問題は国際化した。上流二ヶ国(クルグズスタン、タジキスタン)は、水資源はあれども石油・ガス資源がない。なので、酷寒の冬場に水力発電を行って水を下流に放出したい。下流三ヶ国(ウズベキスタン、カザフスタン、トルクメニスタン)は、石油・ガス資源はあれども水管理は上流国任せにせざるを得ない。これらの国々は夏場の灌漑農業に水を使いたいため、利益が上流国と完全に相反している。クルグズスタンの一部政治家や官僚は「水の商品化」を提案し、タジキスタンは水力発電用の巨大なダムを一方的に建設する。それに対して下流国(特に、ウズベキスタン)は猛烈と反発する。下流国の間でも水利施設(ダムや水路)の建設・運用をめぐって対立がある。その根底にあるのは、水資源を国家の主権の一部と捉えるという考え方である。

しかし、それでも、機能するかどうかは別として、流域水管理について地域全体で議論・決定するフォーラムは存在する。そこでは、ソ連時代からの水管理の専門家がネットワークを構築しており、彼らの紐帯が各国を完全に決裂させないための制止弁の役割を果たしてきた。このようなことも本書では強調されている。

そして、本書が刊行された後の二〇一六年、ウズベキスタンの大統領がイスラム・カリモフからシヤフカト・ミルジヨエフに代わったことで、ウズベキスタンとその周辺国(特に、クルグズスタンとタジキスタン)との関係は雪どけをむかえ、水管理をめぐる上下流国の対立は徐々に収まりつつある。筆者は、「水問題や国境問題が国家主権だけでなく地域という枠組みの中で検討される必要がある」(一七五頁)と述べているが、そのような雰囲気は流域全体で醸成されるのかどうか、改めてフォローすべき課題になってきたと言える。

以上、乾燥地・半乾燥地に位置する中央アジアでの水をめぐる問題を扱っている五冊をここでは紹介した。近世から今日までの中央アジアの

水についてこの五冊でフォローすることができるだろう。乾燥地・半乾燥地での水とはヒトの生命にかかわってくる根源的な問題であり、だからこそ国も社会もナーバスになりやすく、深刻な政治・経済問題になりやすい。近年、豪雨・洪水被害に悩まされる我々だからこそ、逆に水が慢性的に不足している状態に思いを馳せ、中央アジアという地域について触れることで地球全体の将来について考えてみる、もし本稿がそういったことのきっかけになってくれれば望外の喜びだ。

注

(1) 日本では「キルギス」という国名・民族名で知られているが、本稿では現地語での読み方にならない「クルグズスタン」「クルグズ人」と表記する。

(2) James C. Scott, *Seeing Like a State: How Certain Schemes to Improve the Human Condition Have Failed* (New Haven: Yale University Press, 1998), p. 4.